

科目区分：専門教育科目
授業科目名：小学校サブコース演習
登録学生数：2名

「なりきり実践報告」の学習を通して卒業研究テーマを探索する

所属・氏名：英語教育講座 立松大祐

1. はじめに

今年度の履修者2名は、県内の小学校教員を志望しており、特に小学校英語教育にも興味・関心が高く、副免許として中学校・高等学校の外国語（英語）を取得すべく学修を進め、本授業は3回生後期に履修をする。

本授業の目的は、卒業研究に必要とされる各専門分野の知識や技能等に関わる基礎的な事項について学ぶことである。到達目標は下記のとおり3つある。

(1) 卒業研究に向け、関心のある領域・分野に関する予備的・基礎的な知識を修得し、説明することができる。

(2) 卒業研究に向け、関心のある領域・分野に関する予備的・基礎的な技能を修得し、実践することができる。

(3) 主体的に学習に取り組むことができる。

2. 授業の概要

卒業研究を始めるためには、テーマの設定が必要であるが、3回生前期までの英語教育関係の講義等での学習内容だけではテーマを考えるための情報量が十分であると言えない。専門的知見を学ぶため専門書や論文を読み、あるテーマについて深く学ぶと同時に、研究方法や論文の構成を含めた書き方を学び、知識を身に付ける方法がよく採用される。本授業においては、小学校教員志望の学生であるため、より授業実践に焦点を当てたものを選び、実践と研究が往還するよう配慮した(泉恵美子・小泉仁・築道明・大城賢・酒井英樹(編)『すぐれた小学校英語授業－先行実践と理論から指導法を考える－』(研究社))。本書第1部には現役の小学校教員による外国語活動・外国語の実践が分かりやすく記述されている。第2部は理論編として、実践を支えるために知っておきたい理論などがまとめられている。

本授業では、主に第1部の実践内容を背景的知識も含め深く理解するために、その実践者になりきり、実践内容をプレゼンテーションする学習方法を採用した。主な授業計画は表1のとおりであ

る。担当学生AとBは基本的には隔週でプレゼンテーションを担当し、お互いのプレゼンテーション内容に対して質疑応答を行った。

表1 主なプレゼンテーションの内容

担当学生	プレゼンテーション内容
A	6年生のチーム・ティーチング授業
B	5年生のチーム・ティーチング授業
B	6年生の「推測して聞く力」を育てる授業
A	5年生の技能統合型授業
B	4年生の専科教員による「外国語科」授業
	4回生との交流学习
A	4年生の「他教科連携」授業
B	3年生の児童同士のやり取りを喚起する授業
A	1年生のチーム・ティーチング授業
B	1年生の意味のあるやり取りを進める授業
A	指導者に求められる英語力と指導力
B	よりよい評価の在り方と進め方

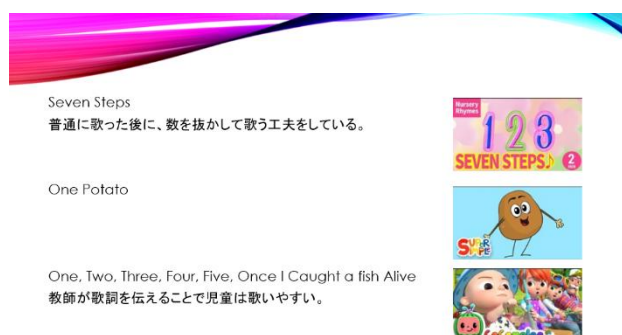
それぞれの実践報告について、その報告者になりきって説明をするため、学生にとっては馴染みのない、または、聞き覚えのない語句に遭遇することがある。例えば、岐阜市立の小学校での実践を報告した学生は、その学校のホームページを閲覧し、教育課程特例校に指定されていることが分かった。プレゼンテーションの際には、他の受講者が教育課程特例校とは何かを理解しやすいような資料を作成した上で、英語教育の実践を説明することができた。また、別の実践報告において、英語のチャンツや歌、異文化理解のための情報について言及されている場合は、インターネットで検索をし、特にYouTubeビデオを活用してそれらの情報を説明しようとするなど、単に紙面から読み取れる情報を超えた、「なりきり実践報告」を行

うことができた。図1と図2は、報告で使用されたパワーポイントスライドの一部である。

図1. 教育課程特例校を説明するスライドの一部



図2. 説明に YouTube ビデオを活用した例



本授業の後半には、小学校英語教育の実践報告を積み重ねた結果、受講者はおぼろげながら卒業研究のためのキーワードを得ることができた。ひとりの学生は「インプットとTPR（全身反応教授法）に、他方の学生は「歌やチャンツを活用した授業」を考えている。それぞれの学生には当該分野の先行研究を読み、さらにテーマを焦点化できるように指示を出した。

3. 学生のアンケート結果（授業評価）と課題

受講者が2人であるが、学生のアンケート結果について述べる。

問11「この授業で出された課題や予習・復習のために、授業時間外に費やした学習時間は平均で一週間に何時間程度ですか」に対して、それぞれ3時間と6時間と回答している。プレゼンテーションの準備のためにかなり時間をかけていることが推察される。

問12「この授業で出された課題や予習・復習をおこなうこと以外の理由で、この授業に関連して時間外に費やした学習時間は平均で一週間に何時

間程度ですか」に対しては、それぞれ2時間と1時間であった。興味をもった領域については、自主的に広く深く学習していくことを強く推奨し指導することが課題である。

問13「この授業を受けて、自分で自発的に読んだ本や論文の数はいくつですか」に対しては、それぞれ0と6と回答しており、かなり個人差が出ていることが分かる。問12での課題と同様に、卒業研究を進める前に、自ら望んで学習をする態度と習慣が身に付くよう支援が必要な部分である。

問14「この授業をきっかけにして取り組んだ、教育実践や授業時間外での制作等の自発的活動は何件ありますか」に対しては、2と1と回答している。附属小学校への授業見学や地域連携実習に参加して、児童をしっかり観察し、実践的指導力を高めさせたい。

「なりきり実践報告」を行うことにより、他の教員による実践を自分ごととして考えることができ、学生は各自の興味や関心に基づいて卒業研究のテーマにつながるキーワードを探し当てることができた。学生にはエージェンシーを発揮し、その研究の種を自分自身にとってやりがいのある、また、社会的にも意義のある、本物の課題になるよう育ててもらいたいと願っている。

4. 「地域社会を核とした教育と研究のつながり」

卒業研究のテーマを考えたり、教育実践活動の機会を増やしたりするために、前期の毎週金曜日に附属小学校にて地域連携実習を行い、9月には本実習を行った。それらの経験から履修者は県内での小学校教員として就職する気持ちを新たにすることができた。本授業では、これらの学習経験を踏まえて優れた小学校英語教育実践例を、実践者になりきって説明することによって、実践例との心理的距離が近くなり、自分ごととして実践を考えることができた。これは、将来、愛媛県で教員をする際に生かすことができる知識と技能になると考える。